

知っていますか？ 郷土の民話

ふざかし薬師

東汗の満願寺には多くの伝説が伝わっていますが、今月紹介するのは満願寺薬師堂の本尊、町指定文化財薬師如来像にかかわるお話です。

昔々、鬼怒川のほとりに年老いた父親と娘が住んでいました。ある日父親は、薬師堂境内の弁天沼に、一尾の大鯉が住んでいることを知って、人が止めるのを聞かずに大鯉をとり、家に持ち帰りました。これを見た娘は大変驚き、すぐに沼に戻すよう泣いて父親に話しましたが、頑固な父親は鯉を料理して食べてしまいました。

この夜、父親は突然苦しみ、日がたつに連れて、徐々に目が見えなくなりました。娘は大鯉を食べたことによる神の祟りだと思い、満願寺の薬師様の助けを得るために、三十七日の願をかけようと、毎日父親の手を引いてお参りをしました。その御利益もありません、三十七日目

がやってきました。その夜、娘は目を閉じて薬師様の名号を唱えていると、いつのまにか眠ってしまいました。すると一筋の光が家を照らし、その中から「お前の父親は大鯉をとった罰により目が見えなくなつた。しかし、お前の日ごろの優しさをたたえて、父親を元通り治そう。そのかわり弁天沼のほとりに家を建てて一生薬師様と弁天沼を守りなさい。」という声が聞こえます。

した。娘は飛び起き、弁天沼で身を清め、薬師様にお参りすると、薬師様は水を浴びたように汗をかいて笑顔で娘を見つめていました。娘は薬師様に感謝をして家に帰ると、父親が元気に朝食を作っていたのでびつくりし、昨夜の夢の話をする、父親は自分の罪深さを反省し、早速弁天沼のほとりに家を建て、一生薬師様と弁天沼をお守りしたといひます。

この話にあるように、熱心にお祈りをする、薬師如来像が汗をかくことから、「ふざかし」の地名に漢字の「汗」をあてるようになったとの説があるなど、満願寺の薬師如来像とふざかし・西汗の地は深い関係があります。また話の中に薬師堂の境内には今は無い「弁天沼」が登場するなど、境内に浄土庭園があったと指摘されている満願寺の昔の様子を、昔話が今に伝えていきます。



薬師如来像が安置される薬師堂は江戸時代の中頃に建てられました

広報短歌

差し入れし賀状の音を確かめて

戻る里みち日暮れの早し

里芋の味懐かしむ娘らのゐて

素朴なお重に新年祝ふ

黒雲に吸はるるごとく落日の

茜色さえしんと冷ゆ

朝もやの奥に静かな連山の

白さ極めて年明けに輝る

枯れ木のみと思いて佇ちし庭隅に

口ウ梅薫る小寒のひる

帰京する孫運転のマイカーを

照らす下弦の月静かなり

風立ちてキラキラ星の冴えるとき

宵の明星一際優る

歳の瀬の落葉掻き寄す其の先に

ころころまろぶ栗の実いくつ

枝蔭に一輪のぞく薔椿

かすかな紅に寒の風吹く

水張らぬ寒の一朝温みある

わがこころさす白熊の声

斎藤アツ子

高田 幸子

武藤 ひさ

菊地 美代

稲葉 敬子